

江戸後期の関東詩壇 ——市河寛齋の「冬の詩」を中心に——

朱 秋 而*

1. はじめに

市河寛齋（1749～1820）の詩風について、昌平饗時代は格調派の詩をよんでいたようである。富士川英雄氏は『江戸後期の詩人たち』（東洋文庫816 平凡社 2012年）で次のように述べている。

性霊説を唱え、清新平明な詩を志すように傾倒したが、必ずしもそれに限らず、時にまた晩唐の詩人の繊巧を愛したのは、彼のなかにあった都会人的な気質と浪漫的な趣味によることであつたらう。

寛齋の詩には客愁や離別、相思などの情を歌ったものが多く唐詩のロマンディズムの良き余韻をかなでている佳作であると言えることができる。洒脱な歌口を示すなど、寛齋はほとんど行くところとして可ならざるはなしといったような、非凡で、多角的な詩才の持主ではあつたが、その変化の多い詩風になんとなく安定感が欠けている。

教育者または指導者としての寛齋が当時の詩壇に致した最も大きな寄与であつたと言つてもいいだろう。「当今の世、号して詩を善くすると称する者、多くは僕の社中より出ず」とのちに寛齋が語つたのも単なる自負の言ではなかつたのである。

また、揖斐高氏は『市川寛齋 大窪詩仏』（「江戸詩人選集第五巻」1990年、岩波書店）の解説に

文化年間における寛齋の陸游への傾倒は顕著であつて幸福な家庭生活といえ、寛齋の詩には親子・兄弟の情愛や家庭生活を直接的な素材として詠んだものが多い。「孤松行」……。詩集の中にこの種の詩をこれほど多く見出すことは、おそらく寛齋以前の詩人にはない。寛齋以後には次第にこの種の詩は増えてはくるものの、寛齋に匹敵するほど多くを詠んだ詩人はあまりいないように思われる。寛齋詩の特色の一つと見てよいであろう。

「詩は風情に本づく。これを風趣に求めずして、これを格調に求む。そもそも遠いかな。（中略）詩を学ぶは一にこれを目前に求めて、必ずしもこれを遠きに求めず」（『詩聖堂詩話』）

と寛齋自身も述べたように、現実から隔離した誇大な士大夫意識にとらわれることなく、日常的な凡情さえもそれが現実である限り率直に詠もうとした、寛齋性霊派としての詩的立場によるところも大きかつたものと思われる。

富士川氏と揖斐氏の見解を踏まえながら、本稿では寛齋が詠んだ冬に関する詩を取り上げ、その詠風の変化を追跡し、さらに寛政期の日本の詩人たちの性霊詩の模範として一世を風靡した范成大（1126～1193）の四時田園雜興や同時代詩人菅茶山の「冬の詩」と比較し、寛齋詩の特徴としていままでいわれた客愁や離別、相思などの情や日常生活の凡情を詠む以外に、ほかの要素と特色はないかを探してみたい。

*国立台湾大学教授

2. 寛斎の冬を詠む詩

まず『寛斎摘草』巻四に収録される「冬の日」という詩を取り上げてみよう。

丹楓黄柿擁林扉 丹楓 黄柿 林扉を擁し
寒影蕭疎透落暉 寒影蕭疎として落暉透る
一夜西風吹不尽 一夜 西風 吹き尽くさず
紛紛更作雨声飛 紛紛として更に雨声を作して飛ぶ

揖斐高氏校注の『市河寛斎 大窪詩仏』（江戸詩人選集第五巻）に「雌伏の日々」に取り上げられる一首である。次のような注と訳が施されている。

天明4（1784）年、36歳の作。『寛斎摘草』巻四。

丹楓 紅葉した楓。
黄柿 黄色く色付いた柿の実。
擁 取り込む。
林扉 林の中にある家。扉は家の意。
寒影 寒々とした木々の影。
蕭疎 木の葉がおちてまばらなさま。
落暉 夕陽。夕日影。

○一夜の句 服部南郭の「浦賀三首」の第一首に「一夜西風吹き尽くさず」とある。吹不尽は俗語的表現で、吹き続いて止まないこと。李白の「子夜呉歌」に「秋風吹き尽さちてず」。西風は秋風をいう。

紛々 乱れ散るさま。李白の詩「夜牛渚に泊して古を懐う」に「楓葉落ちて紛々たらん」。
雨声 雨の音。

紅葉した楓や黄色く色づいた柿の実が、林の中茅屋を取り囲んでいる。寒々とした木々の影はまばらで、その間から夕陽が差し込んでいる。昨夜は夜通し西風が吹きやまず、今日になっても木の葉は雨の降るような音をたてながら、入り乱れつつ飛び散っている。

一句目の紅葉の赤と柿の黄色は秋の季節感をきれいに捉えている。揖斐氏の詳しい注釈で分かるように盛唐詩を意識して詠んだ一首と見てよいだろう。

次に取り上げてみたいのは『寛斎先生遺稿』巻一に収録される七言絶句「雪中の雑詩五首」である。この連作は詩人が越中で藩儒の生活を送っていたときに詠んだものである。

一

圧屋埋門雪過顛 屋を押し門を埋めて 行き 顛を過ぐ
玉山始有五丁穿 玉山 始めて五丁の穿つ有り
如糸逕路通来往 糸の如き逕路 来往を通じ
不使行人争後先 行人をして後先を争わ使めず

前掲の揖斐氏の訳は、「屋根におしかぶさり、門を埋めて、雪は背丈を越えるほど深く積もる。古代中国の蜀王に仕えた五人の怪力の力士が、いま穿ったばかりかと思われるような白く輝く雪の堆積がある。積雪の中には、糸のように細く真っ直ぐな小道があって、往来の利便になっており、人々に先を争わせず、その中を行儀よく歩かせる。」とある。語釈に見えるように「五丁」は中国の『華陽国志』蜀志に見られる5人の怪力の力士である。また「逕路」は鈴木牧之が著す『北越雪譜』にも説明される「雁木」のことという。中国の典故を利用しながら、日本の北陸の豪雪地域の特有な気候と自然風景を際立たせて描いている。

二

欲跨小蹇命吟行 小蹇を跨ごうと欲すれば 吟行に命ず
埋尽寒郊路不平 埋め尽す 寒郊の路 平らならず
雲黒西山風倏変 雲黒く 西山 風倏ち変じ
前邨簔雪後邨晴 前邨は雪を簔り 後邨は

晴る

一句目の「小蹇」は痩せた驢馬のこと。北宋の王安石によって始めて詩に登場した。南宋になると、最もこの言葉を愛用したのは陸游であり、20例確認される。詩の内容は大体つぎのようなものである。

中国の詩人のように小さな驢馬に乗って吟行を命ずる。寒い郊外は雪で埋め尽くされて道は平らかではない。雲が黒く、西山に風が突然吹き出し、前の村は雪が降り出し、後ろの村は晴れている。

詩の前半は陸游がよくうたうロバに乗る詩人のイメージを借りて寒い日の吟行を詠んでいる。後半は高い山連なる越中の天気の変化の定かでないことをよく捉えている。

三

西山一帯玉龍盤	西山一帯 玉龍 盤る
河水湛藍月裏寒	河水 湛藍として 月の裏寒し
可惜城中三万户	惜しむべき 城中の三万户
無人会得把盃看	盃を把りて看るを会得する人無し

三首目は、雪で覆われている雪を頂く西山一帯はあたかも玉龍が盤拠しているように見える。青々として透き通る川水にある月は寒く感じられる。惜しいことに城に住んでいる3万の家々の人たちは誰もが盃を持つてみる事ができないと詠んでいる。

四

破窓寒徹五更風	破窓 寒は徹る 五更の風
八尺身材曲似弓	八尺の身材 曲げて弓に似たり
氷柱幾条垂到地	氷柱 幾条 垂れて地に到り
水晶簾外月玲瓏	水晶簾外 月 玲瓏

一首の内容は

破れ窓から吹き込む夜明け前の冷たい風によって、寒気が侵入する。少しでも寒さを凌ごうとして、私は床の上に横たえた長身の体を弓のように曲げる。(しかし、あまりの寒さに眠ることもできず、ふと屋外に目をやると、) 軒先からは何本もの氷柱が下がって地面に届いている。あたかも水晶の簾のような氷柱の連なりの向こうには、夜明け前の傾きかかった月が、透き通るような美しさで輝いている。

とある(同じ掛斐氏の前掲書による)。補注に記される天保年間刊行の『北越雪譜』に氷柱について

されど我国の人は稚きより目なれたる事なればめづらしからず、垂氷を吟詠に入るもなし。とあり、越中の人々にとっては見慣れた冬の景色であって、詩や歌に読み込む事はないと対照的に、江戸から赴任してきた寛斎の目には奇異に映り、異国の風景を詠じるよい素材となった。

五

密雪沈沈夜欲中	密雪 沈沈として 夜中と欲す
擦簷声淡聴還空	簷を擦る声は淡く 聴きて還た空し
長松能慣低垂態	長松 能く低く垂るる態に慣れて
摧落瑶花不待風	瑶花を摧落す 風を待たずに

五首目は

しきりに降る雪は沈沈として夜中になろうしている。軒に擦りかかる音は微かで聞こうとしても空しい。長い松はよく低く垂れている姿に慣れていて、風を待たずして玉のような美しい花を砕き落とす。

とあり、前半は雪がしんしんと降りしきる夜中に、詩人は耳を澄ましてその音を聞こうとしている聴覚的な描写であり、後半は雪にじっと耐えている屋外の大きな松の枝から透き通って輝く氷の花が

風がなくても落ちてくる情景を描いている。

続いて寛政6（1794）年、寛齋46歳の作で『寛齋先生遺稿』巻一に見られる「客中の記事」という七言歌行を確かめてみよう。

北地節候本無定 北地の節候 本と定り無し
 乍寒乍暖仲冬風 乍ち寒く乍ち暖し 仲冬の風
 簷頭梅花春未放 簷頭の梅花 春 未だ放たざるも
 四山積雪半已融 四山の積雪 半ばは已に融く
 一夜海風来直北 一夜の海風 直北より来り
 黯雲掩天天如墨 黯雲 天を掩いて 天墨の如し
 急雨雜霰屋板摧 急雨 霰を雜えて 屋板摧け
 寒徹枕衾眠不得 寒 枕衾に徹して 眠ることを得ず
 天豈欺人何為然 天豈に人を欺かんや 何為れぞ然る
 恰似人事倒且顛 恰も似たり 人事の倒且つ顛することに
 丈夫壯心当此際 丈夫の壯心 此の際に当りて
 百鍊鍊刀忽為鉛 百鍊の鍊刀も 忽り鉛と為る
 君不見侯嬴魏市監門士 君見ずや 侯嬴魏市監門の士
 能重一言不惜死 能く一言を重んじて死を惜しまず
 安得忠言堅如金 安んぞ忠言の堅きこと金の如きを得て
 号天訴地無所恥 天に号び地に訴えて恥ずる所無からん

越中の厳しい冬を詠む詩の前の部分は、次のような内容である。

北国の天候はもとより不安定なものである。急に寒くなるかと思えば急に暖くなる十一月の風。軒端の梅の花のつぼみは春めいてもまだ綻びないが、周囲の山々の積雪はもう半分ほども融けている。ある夜、海からの風が真北より吹いて来たかと思うと、真っ黒な雲が空を掩い、空はまるで墨を流したようになった。霰まじりの俄雨が降り始めて屋根板は摧け、寒さが枕や夜着のなかにも侵入して眠れなくなった（掛斐氏訳による）。

この詩の前半部の不安定で厳しい冬の北陸の天候の描写は、この時の藩当局の非情な処遇の比喻になっていようと掛斐氏は説明を付け加える。藩儒寛齋の胸中の憤慨をよく言い表わしている一首といえよう。

さらに3年後、寛政9（1794）年寛齋49歳の作で『寛齋先生遺稿』巻二にある「北海道中」という七言律詩は次のように詠んでいる。

如糸路傍北冥通 糸の如き路 北冥に傍いて通ず
 不与南方形象同 南方の形象と同じからず
 随月潮頭無大小 月に随いて 潮頭 大小無く
 碓崖濤勢有雌雄 崖を碓ちて 濤勢 雌雄有り
 天開鴉帶崦嵫日 天開いて 鴉は帯ぶ 崦嵫の日
 海遠鴻呼鞞鞞風 海遠くして 鴻は呼ぶ 鞞鞞の風
 孤客老懷自諳得 孤客の老懷 自ら諳んじ得たり
 越山四度七年中 越山 四たび度る 七年の中

一首の意味は糸のように細い一筋の道が、北の海に沿って通じている。このあたりの景色は南の地方のとは違っている。月の満ち欠けに随って沖から満ちてくる潮の波がしらの大きさは大小もなくそろっているが、断崖にぶつかる大波には男波

と女波の強弱の違いがある。空は広々と開け、鴉が夕暮れの光を帯びて飛び、海はどこまでも続いて、白鳥が故郷鞅鞅の風を呼ぶかのように鳴く。私は孤独で老いた旅人の心境を自然におぼえてしまった。なぜならこの7年間に4回も越後の山々を越える旅を重ねてきたのだから（揖斐氏訳による）である。

山陰にある越中国の自然風土は山陽地方と大きく異なっていることを、首聯に鋭く捉え、克明に描き出している。律詩の力量が試される領聯と頸聯は日本海の荒々しさを波・月・鴉・夕陽・鴻・北風をもってきれいな対句で力強く捉えている。尾聯は7年の間に4回も北陸の高い山を越えていった詩人が老境に入った心情を述べている。

最後に文化2（1805）年、寛齋57歳のときに詠じた「傲具の詩五十首」（『寛齋先生遺稿』巻三）にみえる手炉詩を見てみよう。

先慈所賜在坐右十数年 先慈の賜う所にして坐右に在ること十数年なり。

三冬取友幾年年 三冬 友を取りて 幾年年

吟臥牀頭籠煖烟 吟臥牀頭 煖烟を籠む
最是寒宵伴愁処 最も是れ 寒宵 愁に伴う処

越山風雪夢醒辺 越山の風雪 夢 醒むる辺り

（序）亡き母の下さったものであって、私の座右に十数年間あるものである。

この手あぶりを冬の間の友として選び取って、もう何年も過ぎた。寝そべって詩を詠じる寝床の傍らで、いつも暖かい煙を立ち昇らせている。私がこの手あぶりにもっともありがたみを感じたのは、冬の寒い夜、愁いにとらわれていた時、越中の山々から吹きおろす風雪のために夢から醒めた頃であった（揖斐氏訳による）。

寛齋の母は、この詩の詠まれた前年、文化元年の夏に84歳で病死している。母の形見である手炉

を前にして、愁いに沈んでいた数年前の富山での冬の夜を思い出した作という。母の形見として大事にしている手あぶりを詠むにあたって、寛齋は越中の雪吹雪の寒い夜に詩作に励む一こまを思い出した。

3. 范成大と菅茶山の冬の描写

前の章で寛齋の冬の詩を検討してみた。まず江戸後期の漢詩人たちに多大な影響を与えた南宋の范成大（1126～1193）の「四時田園雜興六十首 并引」の「冬日田園雜興十二絶」（巻二十七）はどのように詠まれているのかを見てみよう。

一

斜日低山片月高	斜日は山に低く 片月高し
睡餘行葉繞江郊	睡余りて行葉に 江郊を繞る
霜風掃尽千林葉	霜風 掃き尽す 千林の葉
閒倚筇枝数鶴巢	閒かに筇枝に倚る 数鶴の巢

二

炙背檐前日似烘	背を檐前に炙れば 日は烘くに似たり
煖醺醺後困蒙蒙	煖醺醺たる後 困して蒙蒙たり
過門走馬何官職	門を過ぐる走馬 何の官職ぞ
側帽籠鞭戰北風	帽を側け鞭を籠みて北風に戦く

三

屋上添高一把茅	屋上添えて高くす 一把の茅
密泥房壁似僧寮	密泥の房壁 僧寮に似たり
從教屋外陰風吼	從教 屋外 陰風吼ゆ
卧聴籬頭響玉簫	卧して聴く 籬頭に玉簫響くを

四

松節然膏當燭籠	松節 膏を然して燭籠に当つれば
凝煙如墨暗房櫺	凝煙 墨の如く 房櫺暗し
晚來拭淨南窓紙	晚來拭い浄む 南窓の紙
便覺斜陽一倍紅	便ち覺ゆ 一倍紅なるを

五

乾高寅缺築牛宮 乾は高く寅は欠きて牛宮を築く
 卮酒豚蹄酌土公 卮酒豚蹄 土公に酌う
 牯特無瘟犢兒長 牯特 瘟無く 犢兒長ず
 明年添種越城東 明年種を添えん 越城の東に

六

放船開看雪山晴 船を放って開かに看る 雪山
 お晴るるを
 風定奇寒晩更凝 風定まって 奇寒晩れて更に凝る
 坐聴一篙珠玉碎 坐いて聴く 一篙 珠玉の碎くるを
不知湖面已成氷 知らず 湖面 已に氷と成る
 おや、もう湖面には氷がはっていたのだな。

七

撥雪挑來踏地菘 雪を撥ねて挑み來たる 踏地の菘
 味如蜜藕更肥醜 味は蜜藕の如く更に肥醜なり
 朱門肉食無風味 朱門の肉食 風味無し
 只作尋常菜把供 只だ尋常の菜把の供を成す
 雪をはらいのけて、地面にへばりついている唐菜を摘む。味は蜜のように甘い蓮根に似て、さらに濃厚。富家の贅沢な肉料理さえ味けなく思われるほどだ。あきることなくいつもの野菜料理を食卓にのぼす。これにまさるごちそうはあるまい（河野みどり氏の抄解による）。

八

槽柚無煙雪夜長 槽柚には煙無く雪の夜は長し
 地炉煨酒煖如湯 地炉に酒を煨めれば煖かきこと湯の如し
 莫嘆老婦無盤釘 嘆ること莫かれ 老婦に盤釘無きを
笑指灰中芋栗香 笑って指す 灰の中の芋と栗の香ばしきを

冬の夜の安らぎのひとつときに、詩人のやさしい視線が注がれる。外には来年の麦の豊作を約束するかのように瑞雪が降り積もる。詩人は、平凡な日

常のいとなみの中に素直な抒情は、読む者のこころを穏やかにしてくれる。（河野みどり氏の解説）

九

煮酒春前臘後蒸 煮酒 春前臘後に蒸し
 一年長饗饗頭清 一年長く饗く 饗頭の清きを
 塵居何似山居樂 塵居 何ぞ山居の楽しみに似かんや
 秣米新來禁入城 秣米 新たに來たるも城に入るを禁ず

十

黃紙蠲租白紙催 黃紙は租を蠲すも 白紙は催す
 皂衣旁午下鄉來 皂衣 旁午として郷に下り來たる
 長官頭腦冬烘甚 長官の頭腦 冬烘甚だし
 乞汝青錢買酒廻 汝に青錢を乞らん 酒を買って廻れ

十一

探梅公子歎柴門 梅を探る公子 柴門を款く
 枝北枝南総未春 枝北枝南 総て未だ春ならず
 忽見小桃紅似錦 忽ち見る 小桃紅きこと錦に似たるを
 却疑儂是武陵人 却って疑う 儂は是れ武陵の人なるかを

十二

村巷冬年見俗情 村巷 冬年 俗情を見る
 鄰翁講礼拝柴荆 鄰翁 礼お講じて柴荆に拝う
 長衫布縷如霜雪 長衫の布縷は霜雪の如し
 云是家機自織成 云う 是れ家機もて自ら織り成すと

中国の江南地方の田園風景を描写する連作で、冬をうたう十二首には、下線を引いた部分のみが雪を描いている。しかし、雪が降っていても豊作の兆しの瑞雪として喜ばれる。寛齋のような北国の冬の厳しさはまったく見られないといえよう。

つづいては寛齋と同じ近世後期を代表する著名な詩人菅茶山（1748～1827）の冬の詩に目を転じよう。『紅葉夕陽村舎詩』巻三にある「冬日雜

詩十首」を次に掲げておこう。

一

晩稻登場四野清 徒杠新架好吟行
雨過午鳩狂花濕 竹塢寒漪立鷺明

二

日乘農隙肆閑行 無処談論不野情
南有吟朋北棋社 兩村相距一牛鳴

三

夜山幽寂讀書堂 寒襲衾裯覺有霜
欹枕耿耿聽落木 半攏斜月暎蒼蒼

四

行厨幾担出閨門 歌道君侯獵隰原
墩子南頭櫟林下 檢田胥吏正開樽

五

寒星爛爛帶林扉 杉頂孤雲凍不飛
隣舍喧嘩綠底事 村人獲鹿鼎扛歸

六

霜融橋板未全乾 半澳寒魚凝作團
樵者相逢相指似 遥山有雪帽危巒

七

烽火雲裏過鴻邊 沙嘴水生亂石前
枕水篔簹藏碓屋 隔濼墟落上窑烟

八

湾頭宿鷺警人鳴 夜杖過橋憂有聲
子月郊村寒未列 冥行十里赴詩盟

九

寒鳥相追入乱松 隔溪孤寺靜鳴鐘
山風俄約晚雲去 雪在西南三四峰

十

獨攤詩軸對寒燈 時見杉梢積雪崩
童子適除村酒至 簑毛如蠶盡成冰

備後の神辺に廉塾を開いている菅茶山の冬の連作は「寒」というキーワードは頻繁に出てくるが、雪が登場したのは下線を引いた三箇所のみである。寛斎の冬詩と比べれば、范成大の田園雜興の詩情により近い温かみを感じられる作品と言って妥当であろう。

4. おわりに

范成大や菅茶山の冬詩と比べながら、市河寛斎は冬をどのように詩に表現してきたのかを確かめ、その詩風を再検討してみた。实景と生活に密着した作詩態度は、具体的に寛斎の冬の詩に現れていると見て取れるだろう。なぜかと言うと、江戸から富山藩儒になり、北陸の厳しい冬と日本海それに高く聳える山々を鮮やかに捉えていると評価できるだろう。南宋詩人范成大や陸游らの影響を受けながら、日本の風景と季節感覚を上手に詩に盛り込み、中国の江南地方により近い瀬戸内海の穏和な気候の田園詩を多く詠った菅茶山と対照的に荒々しい北国の景色と生活を写実に詠じることに成功したと言えよう。

異郷の珍しい景色と風俗を詩人の鋭い観察眼を以て表現していることは、「越中の元夕」（寛政三年の作。『寛斎先生遺稿』巻一）という北越のお盆の様子を詠じる二首の作品にも明らかである。一首目は、

壘間点点樵皮火 壘間 点点たり 樵皮の火

街上鱗鱗燈籠車 街上 鱗鱗たり 燈籠車
此事都門未曾見 此の事 都門 未だ曾て見ず

每逢殊俗倍思家 殊俗に逢う毎に倍ます家を思う

とあり、墓の間には点々と樵の皮の迎火が燃えており、町中の道々には、がらがらと音をたてながら燈籠車が行き交っている。このような盂蘭盆の夜の情景は、江戸の町ではいまだかつて見たことがなかった。こうした珍しい風俗に出会うと、ますます我が家のことが懐かしく思われてくる（掛斐氏訳による）の意である。そして二首目は、

闔邨男女夜如狂 闔邨の男女 夜 狂うが如し

一樣新凝時世粧 一樣 新たに凝らす 時世粧

月映翠簾天欲曙 月は翠簾に映り 天は曙
けんと欲すれども
謳歌拍手舞清光 歌を謳い手を拍ちて 清
光に舞う

である。詩の内容は

村じゅうの男女は、夜になると狂ったように盆踊りに熱中する。皆が同じように最新流行のよそおいを身にまとっている。傾いた月が緑色のすだれに映り、もうそろそろ夜が明けようとする頃になっても、歌を謳い手を拍って、清らかな月の光に照らされながら踊り続ける。

となっている。寛斎は越国の人々の盆踊りに対す熱狂振りに驚き、それを詩に書きとめて表現した。

同じ中元をテーマにした茶山の「茗水即事 二首」(『紅葉夕陽村舎詩』)を見てみよう。

中元時節雨霏霏 中元の時節 雨 霏霏たり
雨夜遊期各処違 雨夜の遊期 各処違う
此日無端問人病 此日 端無く 人の病を
問ひて
長橋独踏月光帰 長橋 独り月光を踏みて
帰る

又

林頭月走夜雲忙 林頭 月走り 夜雲忙し
数店燈毬閃閃光 数店の燈毬 閃閃として
光る

茗水橋辺行客少 茗水橋辺 行客少し
満街風露進新涼 満街の風露 新涼を進む

一首目は病気の友人の見舞いの帰りにお茶の水橋あたりを月に照らされながら帰ると詠う。二首目は「月走」の走る、「夜雲忙」の忙しい、それに「燈毬閃閃光」のピカピカと光るという刻々と変化する動きの一場面を瞬時に切り取って詩の言葉で表した。

関東を代表する詩人寛斎と関西が生み出す茶山はともに南宋詩人から生活に密着する詩情を受容したが、中国的表現を学びつつ、実景と実情を詠

むうちに徐々に日本詩人らしい表現が生まれていったようである。日本と中国の文化の壁を江戸時代後期の詩人は、性霊派の詩論と南宋の田園詩を通して越えていたと見て差し支えないだろう。今後はより全面的に調査し、俳諧との比較も視野に入れて考える必要もあるが、これからの課題とさせていただきます。

参考文献

1. 揖斐高 『市河寛斎 大窪詩仏』(「江戸詩人選集 第五巻」) 岩波書店、1990年。
2. 今関天彭 「市河寛斎」(『雅友』1960年8月)。